

うまた身まかた。感じ歌じ、渡がしただりおちた。よつて一の文をしたため、わたしの想しみを写し、かつ、叔母の知言をするのである。

壬寅は徽宗の宣和四年（一一二二）宋が金に逼られて南渡する五年前であり、庚申は高宗の绍兴十年（一一四〇）岳飛が大いに金兵を破った年である。

范浚は、かれの時代のために、「これらの文章を書いた。」<sup>11</sup>と云ふりあげられた「李孝逸」は、李孝逸その人とは必ずしも関わらぬ。浚は『高僧』の伝をもとにしてこの判断を下した。その伝のあてにならぬことは粗鄙「傍加」にのべた。わたしの孝逸弁護を読んでも、浚の意見がそつかわらぬかもしだれぬという氣もする。ただ、異民族の圧迫下の人々の「ことばと、そつでない人の「ことば」とは同じ表現でも意味が「ことなる」ことを、浚の文を読むときには體慮したい。

それはそれとして、浚は、かれの後讃する詩人李賀が、かれの軽蔑する李孝逸の子孫だと知つたら、どんな額をしたろうか。「耳目箴」<sup>12</sup>にいう「他耳則耳。他目則目。世佛之學。因人碌碌。瞽盲於心。闇見淺俗。我目即面。我耳即耳。中人之學。闇見由己。緣於視聽。微之燭理。不苟而見。不耳而聞。上知之學。燭世是尊。無視無聽。照然者存。」<sup>13</sup>されなふ、別にどうといった額もせぬはずである。

△雜記・50 ▷ 鉏雨亭隨筆

1972.7.14.

伊勢の東家の『鉏雨亭隨筆』卷下に次の二条がみえる。モノ漢文。

李長吉の詩、称して牛鬼蛇神<sup>14</sup>といふ、しかばんもまた翻譯人を動かすものあり。翻譯曲に

う、文道開洞門、弱揚低董戰、簾影竹華起、蕭蕭吹日色、峰語繞妝鏡、畫蛾琴春碧、亂擊丁  
角梢、廣櫻花向夕」と、佳句に「竹香薄寒寂、粉節達生翠」と。奇嶺喜ぶべし。また、  
杯池白雲小の句あり、注に、杯池は池の小なるもの。極めてその小小わざかに杯に似たるを  
いでのみ。天教胡風戰、曉鶯歸田也。常連の、戰餘落日黃、軍敗鼓聲死、とその對疊。  
方鷗の知足吟に「う、人曰白髮我覗て悲しむ、我曰白髮我睨て高ぶ。多少驟撲の人、白髮を  
民て死せず。高オの李長吉、有道の文中子。汗昇いまだ三十なはず、埋ともに眞理に歸す。  
吾が生すでに一にに倍す、鏡に對して宜しく莞爾すべし。」と。達生の體、老態を排するに足  
なり。(沈千萬の詩に、近世大傷多し、喜び見る鬱鬱の曲を。) 沈に喜ひと)

「難波曲」3134(20778) はその詩の題を北宋本に三字の下にセリに「呂詩真習客城陽知縣知復難  
波」の十三字が加わってしる、「難波」を「拂城」とする「」と、やうしてその方がよし」と  
花痴録「鴻小憤」にのべた。この詩の詠歌。運口ぞ、又洞門ひづけしだれやなき、幡舟に垂る竹  
の揮拂すだれに顛ちて、難のふ文田向に吹きぬ、蜂のこそ鏡をめぐり、霞まねぶ春の青山、丁寧  
にや稍に乱れ、垣に満ち花タヅキぬ。第七句の前稿では「沈丁花こすえに乱れ」とした。松田  
玄達の「凡そ物の形狀と大小は方士に似て誤なり、直しゞ驚を訓んで字々比徳と為すべし。未  
だ誤と為さず」(漢詩大系『玉經』セリベーハ注)を「丁香」に応用したのだが、やはり落札つ  
かなしので改めた。「竹曲」の句に「曉鶯歸」3165(20809)、「杯池」の句に「感諷六絶」5227  
(20871)「水教」の句も同じ5224(20868)

方鵬について譚正藝編『中國文學家大辭』は、方鵬（約公元一五二一前後在世）字子風、また時舉、嵩山人。生卒年不詳、明の武宗正德末前後在世、正德三年（公元一五〇八年）進士。初め弟の鳳と学行において同じ傾向だったが、礼に闇する意見が多くいちがい、官は南京太常寺に至ったが棄します。病氣でやめたらしい。著に『鶯亭存稿』十八卷、『續稿』八卷、『責備餘談』、『續說感錄』がある、という。『四庫全書總目提要』は、この集の詩文に疵酬の作が多い。筆記もまた発明するところがない、というだけだ。『總目提要』の東部の記事は信すべきものが多いようである。しかし、やはり自分でたしかめないものは鶯のみにできめた。ただ、方氏の集はわたしには見る便りがなさそうである。東聚は何によつてこの詩を読んだのだろうか。

わたしの見た『鉏雨亭隨筆』は池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第五卷（文會堂、昭和九年六月）に收めるもの。緒考の解説によれば、東聚、字は伯頤、初の文亮と稱し、後ち一學と稱す。夢亭、又た悔菴と號す。伊勢山田の人なり。韓聯玉（山田に學ぶ）に學ぶ。舊茶山、痛崎小竹と交る。享永二年六月十二日歿す。享年五十九。當時、宋詩盛行に行はれしに、夢亭は、獨、唐詩を喜び、唐詩正聲箋注を著せり。其意唐詩復興に資するにあり。それならば生卒は一七九一—一八四九である。『唐詩正聲箋注』を読みたく思ひながらまだ見えないでいる。『鉏雨亭隨筆』は折にふれて読み、そのたびに教えられる。わころがつて該じ本のたのしさを書いているところなど、出くわすたびに、ほゝえましくなる。この人の老後の隨筆に『楊蕪漫錄』のあることを自らいつていが、上梓されたのだろうか。

清の吳孟の『圓爐詩話』卷三に「う。

清の吳孟といへく。李賀は骨勁にして神秀、中唐に在りて墨も高深渾厚、氣格あり。奇なれども諱に入らず、靈なれども纏に入らず。溫庭筠ともに西壁を並稱すと雖も、眞等に纏麗にして近體に長ずるのみ。古は長吉に效いて、全く神を得す。（黃公のいに細々傳説の人によぐること遠し）

（）では吳氏の「う」である。わたしも、まつたくその通りだと、黃氏の「う」に感歎する。黃裳とはいつだいどんなひとだろうと、手もとの詩書を覗いたが、わからぬ。吳氏の詩話を読み直したら手がかりがつかめるかも知れぬが、それが今はわたしの座右にない。吳氏の詩話はたぶん『叢書集成』に収めるものだ。あわただしく書きと、たゞみえて写した日付もつけてない。

吳孟は、太倅の人。一に嵩山の人など。一名曰吳、字は修齡。『清史稿』四百八十九『清史列伝』七十『國朝詩人徵略』初編、五、にその伝がみえるそうである。『中國叢書錄』によれば『難光錄』一巻（指海亭十六集）『西袁發微』三巻（眉月山房叢抄亭十六集、直園叢書第七集、叢書集成初編、文學類）『答鴻寄野詩問』一巻（清詩話）が『圓爐詩話』のほかにある。

吳氏の批評を讀んで思いおこすのは李商隱の「長吉に效う」詩である。長吉漢殿眉、嘗嘗焚宮衣、鏡好空舞、簾疏燕誤飛。君王不可問、昨夜約黃歸。この詩、いつも李賀に似ないのでどうしてかと云ふことだけ、かねてしぶかしく語っていたが、ちかく手に入れた清の朱鈞齋等註、

沈厚坤編訳『李義山詩集』の無署名の評が他の作は往往取扱に似る。独り此に長篇に效いだう。乃ち竟に似ず。未だその説を喻らずノレーハをみて、同じ感じをもつて人がいるのだなどおかしかつた。『四品集刊』に收める明嘉靖本『李義山詩集』では「效唐詩」の前に「房中曲」がある。舊紙泣幽素 翠帶花錢小 婦郎廢若雪 抱日西薰曉 桃是龍宮石 誓得秋波色 丘臺失桑樹 但見蒙羅碧 墓得前年春 未語悲命年 鮎來日不覗 錦瑟長於人 今日凋哀松 明日山頭蘿 芬到天池翻 相看不相識 李賀にも「房中歌」3160(20804)があり、その本文と訳文は拙稿「唐の太宗」に引いた。「房中曲」に「房中歌」に似たが、全般に李賀の詩に效いたという感じは濃厚で、「幽素」という特異な語は、謹む「傷亡行」2087(20731)の「病骨傷幽素」からとったものであらう。

李商隱も温庭筠もわだしの愛読した詩人にちがひない。だが、李商隱とすれかを、ことわりにたら、わだしだめかうことなく温庭筠を捨てて質をとるだらう。やら理由を問われて伝統的な評語で答へなければならぬ。「骨勁にして神秀」と董氏がいつてゐることでも答えるだらう。ただ、こゝした評語は印象批評として的確ではあっても、他の詩人にも使えることではあって、その骨勁と神秀とが成立する基盤まで施り上げておかないと、たとえば明治这样一个時代におもしろい時代だから明治生れの人間がみなおもしろいといった式の飛躍が飛び出してくるがそれがある（さきのうかかはり高名な東洋史の学者がそういう風な氣炎をはいていた）。人の國を無土とする正義もあるのだから、神秀も骨勁も、皮をけいで中味を確かめる必要がある。

押入れを整理したら一九五四年の日記が出てきた。二月一日のところに李賀の「潞州張大宅病通遇江使寄上十四兄」(3133)についてノートを書いている。△雑記・30▼に「S詩にふれ原詩を引いているので、それをほぶく。

十四のあいでにある臨閣に秋がやってきたら、私のじる趙の地はめっきり寒いのです。幸便に托して娘につもる「しなしじ」と書きつらねては、また便箋を切っていきます。旅に病人で夜すがら寝られず曉になつてうとうとすると、桐の破れ葉が緑の苔にはさと落ちるのです。城のひめがきに鶴が啼き、ラッパの音が川霧をわたつてしまひります。ナイトキャップのままカーテンをかかげてみると、水の涸れた池に蓮が折れ、木窓には蛭でも這つたのでしょうか銀色のすじがいくつもついていて、石段には水ごけがべりついています。旅の酒は愁多い肺にしみどおり、離別の歌はものうく琴の絃にまつわるのです。手紙の封をしようとしたときには、私の目からいっぱい涙が流れていました。目の前の蘭までがしとりと髪をおいているではありませんか。はましげはたけてはたおりがすすり泣き、松のこすえは枯れてその向うに獸の形をした墨痕瓦がのぞいています。目ざめては燕の地の馬にまたがり、夢に楚の溪の船をこぐ……そんな私の日ごろなのです。香りたかい酒を大テーブルで傾け、玉のむしろです、そのフライにフォークを入れる、どちらでのあなたの生活は、恐らくそういう了樂しみに満ちたものでありますよ。しかし、昔のことをおとされてあなたがあへでそちらに居つてしまふといつようなことは、ないのでしょうね。

(大意)

「一の詩は元和十年か十一年の秋の件で湯州の張徹の客となつて久しう、病んで身も心も思ひつかぬころ、にまたま和州に向う使者に出会い、手紙を託して、十四兄に気候の過順な南地に招いてくれるようになんだものであろう。」この詩の末の「覺駄然地馬　夢載楚溪船」には願望が、「豈能忘旧路　江島滞佳年」には依頼の情が濃く出ているではないか。

朱自清氏はいふ。

篇の題を忘るる能わざるを尋ねるに、或いは湖口の方となし、或いは兄弟の好みとなす。しかれどもなおこれに止まらず、あるものあるに似たり。詩の末にいづ「椒桂傾良辰　鱸鰯研戒筵　豈能忘旧路　江島滞佳年」旧解に終に了了たらず。椒桂鱸鰯は明らかに路の臺にあらず。句はまた、下に属して読みべし。おもうに少時かつて江島に滞留し、今に至つて旧路を忘れ難きのみ、集中に集中の風土を詠するものすこぶる多し。そのうちもどより樂府の旧題を用うるものあり。しかれどもその詩を読むに、かつて身歷をふるにあらざれば、彼の親切眷念するが「ことまこと」能わざるべきがことし。「通和柳惲」「大堤曲」「蜀國絃」「蘇小小墓」「湘妃」「簫頭郎」「湖中曲」「羅浮山父與萬篇」「蘆葦東城」「釣魚詩」「安樂宮」「石城曉」「巫山高」「江南舞」「興富夫人」「江樓曲」「舞愁曲」等、踪跡みな異楚の間にあり、おもろに賀は京に入るの先、かつて往きてその十四兄に依り。故に江南の風色を飽領する迄得しなり。

李賀年譜

す／＼ぶる車見である。

私は「壱能忘旧路 江島滞佳年」を十四兄にかけたが、朱氏は長吉にかける。朱氏の解なら、かつてへあなたにまわかれて、その地にあつたとき、椒酒桂酒を豪爽にくみ、鰐鮒をふんだんに味わつたものですわ。ああ、あの旧遊がどうして忘れられましようか、江島に滞在したちの佳き年のことが……。

となるであろう。

この詩には濃厚な倦怠の感情がある。それはバスカルの情念なく、職務なく、娯楽なく、勉強なく、全く休息していることほど、人間にとて堪えがたいことにはない、彼はそのとき、自己の空しさ、過満なさ、物足りなさ、力なさ、つれなさを感じる。彼の魂の奥底からは直ちに、倦怠、憂鬱、悲哀、懊惱、怨恨、絶望が湧き出るであろう。ベンセーミー由木康次

を思ひせる。

「病客眼清晩」の一句は、病者、ことに肺結核の患者が、終夜眠れず、晩至つて睡りにおちいる状態を、無比の的確さで表現している。

「木窓銀跡画」について、吳正子は「腹に結綿の飾あり、いま木窓銀跡画といはば、必ず銀沫を以て彩画せしなり」とい、徐渭はこれを否定して「篇中に修語なし、窮屈を述ぶるに似たり。缺うらへ口端跡を指すものか」とい、王穉け、徐の解を「はなはだ、豈づに似たり」と駁して吳

注に左袒し、さうに「けだし、木窓の上に、もと塗銀彩画ありしを、いう。たゞ年深て色淀の、わすかにその跡を存するのみ」という。

異正子や王琦の解は、長吉の倦怠の深さを味到しないどころかう出でているのである。さすがに徐渭は、長吉を力追した詩人で、しかも窮境に多年を遁っているだけに見方が的確である。木窓に蝸牛や蛭の這った跡の光っているほどわびしさをぞぐるものはない。これが「蝸跡」だからこそ、長吉のやるせなさが生動するのである。「蝸跡」の本體でない所以は、この句の後に「石燈水痕錢」のあることによっても証せられるであろう。

「旅酒侵愁肺 韶歌綻憎絃」は私の愛してやまない句だ。私のみではない。たとえば明の王考泓（次回）がいる。その「独酌」（疑雨集卷一）に、

旅酒衝愁薄 庭梅离賞孤 偶乘清月伴 惟與博山俱

模倣というより、「旅酒侵愁肺」を愛憎するあまり、おのれの詩中に點化したものであろう。ただ、次回の詩は、長吉を知らずに読めば、かなりたくみな作どうけとれようが「旅酒侵愁肺」とならべたときには、読むに堪えなくなる。

長吉詩は、具体的であり、個別的であり、その倦怠のムードは濃厚であるに対し、次回詩は、観念的であり、一般的であり、ムードは淡泊であるからである。

すぐれた詩句といふものは、天地の間にただ一回きり許されたことばの組合せなのだ。それがいかに美しく、美しいからといって、その一部を変更しておのれのものとしようとしても、その

変更が、すでにただ一回きりの組合せを破壊する。「一二一」とは、漢の武帝の「李夫人歌」と、白居易の「李夫人歌」中に組みこまれたことと、比較しても明らかであろう。

「離歌続情絵」の続の一章のもて「デフォルメの釋義」に注目せよ。

△遊記・53▼ 固執せぬ流動

1972.7.16.

一九六七年七月、わたしは『和辻哲郎全集』ほか一し読み、第五巻「原始仏教の実践哲学」から数条かきぬじてある。これに原始仏教の解釈として正確であるかどうかを判断する力は、わたしにはない。和辻の文庫が、「一」では、李賀の詩の流動と凝固が同在するようなふしきな構造を考えるまでの示唆を、擱じてあるように、感じたのである。以下は和辻の文章である。

すべて時間的に育るためにには取締固執を要し、固執せられて育るためにには能動性を要するのである。「一」でも固執の根柢を求めて、固執がかつて否定した流動に還れるものすなわち固執と流動とを止揚せられたる契機として含むところの能動性が立てられるのである。「渴」という言葉が比喩的に示しているのは、まさしく流動せんとする固執、固執せる流動にはかなうめである。

一般に何の感受もないところでは能動性は空虚であり、從って固執せられる何ものもない。かく能動性は、それ自身空虚なものではなく固執によって何ものかを有らしむるものとしては、受するわち受動性に基づいたものでなくてはならない。受容せられることにに基づいて能動するがゆえにあるものが固執せられて育り得るのである。「一」でもまた能動性としての愛の根柢が、その否

定であると「N6は受動性に求められて居るのを見いだす。」――マージ

戒に向かうにいたり、とて育ることを止揚して育るべき、「N6」と表現すれば「N6」である。「N6」はたゞきの方向としての寂滅涅槃にまで、「理想」であり「絶対的禪」である。=五三ページ

当論は確かに実践的生活の否定ではあるが、しかし否定は單なる戒却ではない。実践的生活は言わば戒の作用に渗透され、戒の作用の具体化としての「般若の立場における実践的生活」に表れるのである。かかる実践的生活は、法に基づいて育ると「N6」の実践的生活とは原則的に異なっている。人間的な愛は「N6」で慈悲になる。事実的な価値の追求は「N6」では當論としての価値の実現になる。「N6」の意味で道徳は事実的に育る実践的生活の規範とされず、「N6」生活を育るべきものに姿容するところの規範となるのである。「N6」には自然的傾向において目ざされる価値と、その価値において現れる眞実の価値との區別があり、道徳の意味はただ後者においてのみ見出される。従つて地上の任務は放棄されると「N6」ではなく、最も峻厳に課せられるのである。  
=五四ページ

### ▲筆記・54▼

静  
林  
橋

1972.7.22.

かつて大阪の市立美術館に中国の文人画が展覧されたに「N6」がある。なかに鄭板橋の竹の図があった。あ、李顥だ。わたしはそう思った。「昌谷北園新集」第二回2104(20148)がそのまま絵となっていた。そこにあるような感じだった。帰つて板橋集を見ると、李顥とはかなり似て違つて讀だ。しかし自分が質の讀を継続している「N6」の讀があることで明白かだ。

畫苦短

畫苦短 夜正不長 漢歌妙舞看不足 樓頭曙鼓聲遙皇 明星拔地綫數尺 日光搖動來扶桑  
畫苦短 畫亦不短 山中暇日如小年 壽世光陰疾如箭 古末開國多聖明 歷盡艱難身百戰  
一朝勘定稱至尊 承明殿上頭毛髮 宋明粢盡還麥稈 赤松青帝培靈氣 學仙學佛空爾爲 畫  
苦短 四日飛

秦宮詩後長吉作

方庭四角燒龍香 酒闌妓合燈煌煌 金與翠幃肅人敢 只有秦宮入畫堂 南堂夫人賂金兜 北  
堂相公同繡被 未識歡哥一片心 平分福向知何寄 內寵外寵重復重 畫有微眠夜無寐 自古  
流花築雨風 海棠不得結煙柳 天生桀黠奴非眾 柔軟嬌慈復駭勇 鶴鵠承明百尺墻 斗上平  
翻燕赤鳳

筆の「苦畫短」[3162(2080)]、「秦宮詩」[3157(2080)]にもとづく作品であることはいうまでもある  
まい。

板橋、名は繁（一六一三—一七六五）、字は東石、へ揚州ハ怪の一人に教えられ、書画の名  
が詩名を壓するが、その詩のいくつかは書画にみどりぬだらう。ともかく、李翼の理解者の一人  
として決してられることができない人だ。

正

誤

第六号 二一頁 4行 無日不 無日と訂正。二五頁 7行 「戰死」 「戰士」と訂正。

三六頁 12行 一週 一週間と訂正。四三頁 11行 六章 七歲と訂正。

表紙の目次に采叢 7と 8を記入しなかつた。

岸七号 六八頁 15行 李長 李長吉と訂正する。

見

贈

荒井健氏『文學論集』(中國文明選13)「感風」1・2 青木敬介氏『播磨灘』(詩集)。

小高根二郎氏『果樹園』190・196、鈴田尹氏『王謝の系譜』(一)(二)(三)(農児島大学教養部文科報告  
四・五・七括刷)、上原淳道氏『読書籍識』(一)(二)(東京大学教養学部人文科学科紀要第五十四輯歴  
史と文化X(歴史学研究報告第十四集)抜刷)、重森紳一氏『ナンセンスの練習』『日本ナンセン  
ス画志』『現代詩手帖』刊・12・72・7、富士正晴氏『白崎禮三詩集』『苛烈な夢 伊東静雄  
の詩の世界と生涯』、山中智惠子氏『三輪山伝承』、上尾龍介氏『原田憲雄氏の李鄭論文』  
(中国文学論集第三号)

後

記

第七号の発行が大変おくれ読者各位からたびたびおたずねいだとき申訟ない。本号は百頁とした。  
次号の予定はたっていない。八月末には『方向』第十五号を発行の予定である。

本号をもって本照院達義日輝信士・鶴林院妙照薦女の忌日を紀念する。